

平井尚志の なめとこ山通信



第73回 映画と本

皆さん、こんにちは。梅雨入りして、天気にも翻弄される日が続きますが、いかがお過ごしですか。前回の会報が3月号で、あれから早くももう7月です。新年度になって3ヶ月以上経つわけですが、私は特に代わり映えのしない日々を送っています。ただ、勤務先の学校は2年目に入ったので、忙しくはなりました。今回の「なめとこ山通信」も、特にテーマもなくダラダラと綴ってお茶を濁してしましますが、よろしかったらどうぞお付き合いください。

5月の中旬に、映画を観ました。清原果耶主演「青春 18×2 君へと続く道」という映画です。監督は、藤井道人。映画を見て、ちょっと泣いちゃいました。それで、その前に泣いちゃったのってどの映画だったかなと記憶を辿ってみると、やっぱり同じく藤井監督作品の「余命 10 年」でした。藤井監督にまた、やられた！てな感じです。前は、小松菜奈を見に行き、今回は清原果耶をと思って、そういうミーハーな気持ちからでしたが、良い映画でした。この、「青春 18×2 君へと続く道」で、ダブル主演を務めたもう一人は、台湾の俳優、シュー・グアンハンでした。藤井監督自身が、実は祖父が台湾出身の方ということで、監督のルーツの一つである台湾との共同プロジェクトでできた映画ということでした。18 年前の台湾と、現在の日本とが繋がる、ロードムービーでもありました。劇中には、台湾と日本のランタン祭のシーンがあるのですが、本当に素敵なシーンでした。先日、台湾に旅行をしてきたという友人と話をしたのですが、やっぱり台湾で、ランタンを飛ばしてきたと言っていました。なんだからとっても良い所のように、台湾。ああ、行ってみたい！と思ったのです。





そうして、6月の中旬にも、映画を観ました。河合優実主演「あのこと」という映画です。監督は、入江悠。こちらも、河合優実を見に行こうという理由で映画館に足を運びましたが、見ていてたいへん辛い内容の映画で、見終わった後は、心がどよーんとしてしまいました。なのであんまり、お勧めはしません。2020年、コロナ禍の日本で現実に起きたことをモチーフに、入江監督が映像化したということです。こんなお話しです。幼い頃から母親に暴力を振るわれ、十代半ばから売春を強いられて過酷な人生を送ってきた主人公の杏が、覚醒剤使用容疑で取り調べを受けた時に、多々羅という刑事と出会ったことで、少しずつ生きることへの希望のようなものを見いだしていく、かに見えたのですが……。ああもう、あ

らすじを書いただけで辛くなります。実際に入江監督が、コロナ禍で大切な人を亡くした時に、「すこしだけ注意を向ければその人の苦しみに気づけたかもしれないのに、自分のことばかりで精一杯でした。時代の移り変わりがどんどん早くなり、多くのことを忘れていってしまうから、この映画を作って刻みつけておきたいと思い」「鎮魂の気持ちをこめて」(公式サイトより)作った映画ということです。思うと、たった数年前のことですが、私たちはなんだかあのコロナ禍の日々を、忘れてしまっていないでしょうか。見ていて辛い映画でしたが、心に残るものはありました。あ、河合優実さんは、これからも注目していきたい女優さんだなあと、思いました。

次は本の話です。最近読んだ本でダントツに面白かったのは、『未必のマクベス』という小説です。作者・早瀬耕。厚い文庫本で(1000円しました！)、なかなか手に取りにくいかもしれませんが、読み始めたら夢中になって、読了はあっという間でした。「IT企業ジェイ・プロトコルの中井優一は、東南アジアを中心に交通系ICカードの販売に携わっていた。同僚の伴浩輔とともにバンコクでの商談を成功させた優一は、澳門の娼婦から予言めいた言葉を告げられる「あなたは、王として旅を続けなくてはならない」。やがて香港法人の代表取締役として出向を命ぜられた優一だったが、そこには底知れぬ陥穽が待ち受けていた。」(背表紙より。)本屋に行けば今も、面出しや平積みで陳列されているかもしれませんが。私が買った本屋では、ポップが熱くて、本当に面白そうだなって伝わってきて、厚

くて重い文庫本にもかかわらず、買ってしまいました。そうして買ってきて、損はなかったと思っています。ところで「マクベス」とは、言わずと知れたシェイクスピアの戯曲です。実在したスコットランドの王や将軍を登場させた作品で、マクベスが王を暗殺し、自ら王に即位してからマクダフという貴族に討たれるまでを描いた作品です。この『未必のマクベス』も同じように、中井が王(代表取締役)となり最後は、……という展開です。ただ、マクベスのことを知らなくても、登場人物たちが説明してくれるので、充分楽しめます。私も、シェイクスピアは、未読です。(「ロミオとジュリエット」や、「ヴェニスの商人」くらいなら、なんとかストーリーはわかりますが。)なのでこれを機会に、シェイクスピアを嚙ってみようかなという気にもなりました。



それから、わりと話題作のような気がして読んでみたのが、『燕は戻ってこない』です。作者・桐野夏生。(そしてこれも1000円しました！ 文庫本、高くなっちゃったなあ。)こちらは、NHKで最近ドラマ化されていたので、あああれかと思う方もいらっしゃるでしょう。こんなお話です。「憧れの東京で病院事務に就くも、非正規雇用ゆえに困窮を極める29歳女性・リキ。「割のいいアルバイト」だと同僚に卵子提供を勧められ、ためらいながらもクリニックに向かうと国内では認められていない〈代理母出産〉を持ちかけられ……。」(背表紙より。)女性の貧困や、出産、生殖医療ビジネス等を扱った問題作です。NHKのドラマは見ていなかったのですが、「ドラマの配役がうますぎる」という書評？があったりして、テレビの方も見ておけば良かったと思ったりしました。本は、すごく良いというわけでもありませんが、濃い内容に満足できました。作者の桐野さんは、日本ペンクラブの現会長でもありますね。女性初の会長だそうです。ファンの方も多いのではないのでしょうか。



そういうわけで、毎日の読書と、時々映画鑑賞で過ごしている今日この頃なのでした。気付くと7月。夏休みまでもうちょっとです。梅雨明けしたら、今年こそは山登りに出かけたいなあと思っている、なめとこ山でした。